

変奏されるドラマ —— 元雜劇「魔合羅」「勘頭巾」試論 ——

廣 瀬 玲 子

はじめに

元雜劇の公案劇（裁判もの）といえば、包拯が裁きを下す包公戯が有名である。しかし、「元曲に登場する包拯は、本来必ずしも有能な人物とはいえず、「それを有能ならしめているのは、彼を援助する外的な力」であることが多い。「外的な力」とは、犠牲者が亡霊となつて現れて真実を告げたり、夢によつて解決の手がかりが与えられたりすることである。¹⁾

一方、元雜劇には包拯以外の裁判官が登場する作品もあり、そのなかで、六案都孔目の張鼎が裁きを下すのが「張孔目智勘魔合羅」（以下「魔合羅」と略す）と「河南府張鼎勘頭巾」（以下「勘頭巾」と略す）の二種である。この二作品においては、「外的な力」に頼ることなく、「胥吏である張鼎が、綿密な調査にもとづき、事件を解決する²⁾。いずれの作品も殺人事件を扱い、犯人の陰謀によつていったんは無実の者が獄につながれるが、張鼎の推理によつて真犯人が判明し、しかるべき判決が下されるのである。「魔合羅」では被害者の妻に横恋慕する徒弟が犯人、「勘

頭巾」では被害者の妻と私通している道士が犯人であり、どちらも殺人に及ぶきつかけは色恋沙汰である。二作品には、被害者の妻たちの貞／不貞は対照的であるものの、ほぼ同じ構造が隠されているが、その構造の内にあつて劇を展開させる諸要素の配置の仕方においては「魔合羅」が格段に優れている。本稿では、「魔合羅」の構造とその劇展開の力学を明らかにするとともに、戯曲制作の手法の一つの可能性を提示したい。

一 「魔合羅」のあらすじ

それではまず、あらすじをざっと追ってみよう。¹⁾

・第一折（正末は李徳昌、場所は河南府録事司醋務巷↓五道將軍廟）..

李彦実が、息子の李文道（賽盧医²⁾）と登場。次いで、向かいで糸屋を営む李徳昌が、その妻劉玉娘と幼い息子仙留とともに登場する。李徳昌は占いで予言された百日の災難を避けるために南昌に商売に出かけるので、叔父である李彦実に挨拶に来たのだ。帰り道、玉娘は夫に、文道が頻りに自分をからかうことを打ち明け、徳昌は留守中気をつけて家事に専念するよう言いつける。一方、李彦実も、兄嫁をからかうなど息子をたしなめる。³⁾

徳昌が出発してしばらく経ち、李文道は玉娘をからかいに行つて父親に叱られる。李徳昌は行商の帰り道、もう少しで街へ帰りつく手前で雨に降られ、郊外の五道將軍廟で休むが、熱を出して寝込んでしまう。徳昌は、同じく雨宿りにやってきた魔合羅（七夕人形）売りの高山⁴⁾が街へ行くというので妻に迎えに来てくれるようにと伝言を頼む。⁵⁾

・第二折（同上、場所は醋務巷↓五道將軍廟↓醋務巷↓役所）..

高山が李徳昌の家を探して李文道の葉屋のまえにやってくる。徳昌の家の場所を尋ねられた文道は用件を聞き出し、先回りして徳昌を葉殺しようと思いついて、高山にはでたらめの場所を教える。高山はあちこち歩かされて疲れ果て、とある店のまえでしばし荷を下ろすと玉娘が出てきて、ここが目指していた家とわかる。玉娘は伝言の礼を言い、高山は仏留に魔合羅を一つ贈る。玉娘はすぐに徳昌のもとへ駆けつけることにする。片や五道將軍廟にいる徳昌が、玉娘がなかなか来てくれないのをあやしんでいると、文道がやってきて診察するふりをして徳昌に毒を盛り、金品をもつて逃げる。次いで玉娘が到着し、動かない夫をロバろばに乗せて家に連れ帰ると、徳昌は七つの穴から血を流して死ぬ。あわてて李文道を呼ぶと、自分の女房にならなければ殺人犯として訴えたと詰めよられ、女房になるのを断って役所に訴えられる。玉娘は拷問を受け、虚偽の自白をして牢屋に入れられる。文道は令史（胥吏）に賄賂を贈っていた。

・第三折（正末は張鼎、場所は役所）…

河南府に新しい府尹（長官）が着任する。玉娘は再び取調べを受けるが令史に脅迫されていて何も言えず、死刑の判決を受ける。役所の門のところで刑場へ護送されるのを待つ劉玉娘を六案都孔目の張鼎が見てあやしみ、玉娘の訴えを聞いて判決に疑問を持つ。府尹や令史は機嫌をそこね、府尹は張鼎に三日以内に無実を証明するよう命じる。

・第四折（同上）…

張鼎が劉玉娘の枷を解いて取調べをする。玉娘は夫が病気であるという知らせを持ってきたのが魔合羅売りであつたことを徐々に思い出す。家にある魔合羅を取ってこさせると、裏に「高山作」と銘が入っているので高山を召喚する。取り調べていると、高山は劉玉娘に会うまえに賽盧医に会つたことを思い出す。張鼎は一計をたくらみ、

李文道を呼んで、府尹の奥方が病氣だといって薬を処方させ、それで奥方が死んだと装う。文道は、張鼎の誘導によつて父親の彦実^{ヒコノサト}に罪を着せようとする。その話を聞いた彦実が徳昌殺しの一件と取り違えて李文道が殺したのだと白状し、すべてが明らかになる。張鼎は府尹に報告し、府尹により判決が下される。

二 「魔合羅」の構造

次に、劇の構造を詳しく見ていきたい。

①設定

劇は親族のなかの人間関係に端を発している。登場する五人の親族は二つの家族に分かれる。一つは李彦実とその息子の李文道である。李文道は医者であり、生薬屋を開いている。もう一つは李徳昌とその妻の劉玉娘、幼い息子の仏留の三人である。糸屋を開いている李徳昌は李彦実の甥、すなわち李文道の従兄であり、李文道はかねてから劉玉娘に横恋慕している。

②出立

まず表れる変化は、李徳昌が行商に旅立つことである。占いにより、災難を避けるために百日のあいだ自宅から百里以上離れた場所へ逃れることになったのだ。すぐ近くに住んでいた二組の家族のうちの一人が別の場所へと「移動」し不在となる。それによつて、これまで緊張をはらみつつも静止していた関係が動き出すことが予想される。しかししばらく経つても、文道が玉娘をからかいに行つては父親に怒られるという反復にさしたる変化は見られない。

③ 帰り道

行商に出た李徳昌はかなりの利益を得て帰途に着く。家のある街も近づいてきたとき、大雨に降られてびしょぬれになり、五道將軍の廟で雨宿りをするが、そのまま熱を出して寝こんでしまう。五道將軍廟がこのあとの事件の現場となるのである。そこへやはり雨宿りにやってきたのは、これも行商人で毎年七夕のころに魔合羅（七夕に家々で飾って願いをかける人形）を作って売り歩いている高山である。これから街まで行くという高山に対して李徳昌は、自分の家を訪ねて、病気で廟に臥せっているので迎えに来るようにと妻に伝えてほしいと頼む。善良な高山はためらいつつもこの依頼に応じ、廟を出てゆく。

（高）我知道了、你放心。（末）老的、在心者。是必走一遭去。

【賺煞】你是必記心懷、你可也休疑慮。不是我囑付了重還囑付、爭奈自己耽疾難動拳、你教他借馬尋驢莫躊躇、又爭奈紙筆全無、怎寫平安兩字書。爺爺你莫阻、説与俺看家拙婦、教他早些來扶策我病身軀（下）。

（高山）わかったから、安心しなされ。（李徳昌）ご老人、よろしくお願ひします。きつと行つてくださいよ。

【うた】どうかしつかり覚えて忘れずに、よもや心変わりをなさらぬよう。何度もお頼みしてくださいます。病のせいで自分の体も思うようにならず、どうしようもありません。どうか家内に馬かロバを借りて急いで来るようにお伝えください。困ったことに紙も筆もなく「無事」の二文字もしたためられません。ご老人、どうぞすみやかに、我が家を守る妻にお話ください、病気のわたしを早く助けに来るように。

ここで李徳昌が頼りにできるのは、たまたま出会ったこの高山という行商人の善意と伝達能力のみである。李徳昌自身が動くことができず、しかも「紙筆」がないので手紙を書くこと、つまり伝言を文字にすることもできない。高山が李徳昌の家をさがして妻に伝言することを忘れたり放棄したりすれば命が危ない。高山がいわば伝言を書き

つけた生きた手紙として、妻の元に届くことを願うしかない。第一折は緊張が高まったところで、高山の退出ともにも終わる。

④事件

さて、この伝言は、李徳昌が懸念したのとはちがった理由で、誤った相手に届いてしまう。李徳昌の家のそばまで来た高山が、たまたま李文道に道を尋ねてしまうからである。第二折冒頭から引用しよう。

(李文道上) 自家李文道是也。今日無甚事、我開開這藥舖、看看甚麼人來。(高山上) 老漢高山是也。來到這河南府城里、不知那里是醋務巷。我放下這担兒、試問人咱。(見李科) 哥哥、敢問那里是醋務巷。(李) 你問他怎的。(高) 這里有個李徳昌、他去南昌做買賣回來、利增百倍、如今在城南五道將軍廟內染病、教我与他家寄個信。(李背云) 好了。則除是這般。(向高云) 老的、這是小醋務巷、還有個大醋務巷。你投東往西行、投南往北走、轉過一個灣兒、門前有株大槐樹、高房子、紅油門兒、綠油窓兒、門上掛着斑竹簾兒、簾兒下臥着個海叭狗兒、則那便是李徳昌家。(高) 謝了哥哥。(做挑担行科) 好哥哥説与我、投東往西行、投南往北走、轉過灣兒、門前一株大槐樹、高房子、紅油門兒、綠油窓兒、掛着斑竹簾兒、簾兒下臥着個海叭狗兒。倘若走了那海叭狗兒、我那里尋去。(下)(李文道) 便好道、人有所願、天必從之。我則這等也要所算他里。他如今得病了、我也不着嫂嫂知道、我将着這服藥走到城外藥殺他。那其間、老婆也是我的、錢物也是我的。憑着我一片好心、天也与我半盃飯吃。(下)

(李文道、登場して) 俺は李文道だ。今日は特に用事もないから薬屋でも開けよう。誰がやってくるかな。(高山、登場して) わしは高山でござる。河南府の街までやってきたが、はて醋務巷はどこじゃろう。荷物を下ろして尋ねてみよう。(李文道に挨拶するしぐさ) にいさん、ちょっとお尋ねしますが醋務巷はどこでしょ

う。(李文道) なぜそんなことを聞く。(高山) 実は李徳昌というお人があって、南昌まで商売に行つて大いに儲けて帰つてきたが、いま城南の五道將軍廟で病氣になり、わしに家族への伝言を頼んだのじゃ。(李文道、背を向けて) しめた。そうこなくっちゃ。(高山に向いて) じいさん、あいにくここは小醋務巷で、もう一つ大醋務巷があるんだ。東に向かつて西へ行き、南へ向かつて北へ行き、角を曲がると、門前に大きなエンジュの樹。りっぱな屋敷で、赤く塗つた戸口に緑に塗つた窓、戸口に掛かるは斑竹のすだれ。すだれの下には狎が寝ている、それが李徳昌の家さ。(高山) ありがとう、にいさん。(荷物を担いで歩くしぐさ) 親切なにいさんに教えてもらつた。東に向かつて西へ行き、南へ向かつて北へ行き、角を曲がると、門前に大きなエンジュの樹。りっぱな屋敷で、赤く塗つた戸口に緑に塗つた窓、掛かっているのは斑竹のすだれ、すだれの下に狎が寝ておる、と。その狎がどこかへ行つたらわしはどこを探せばいいのじゃろう。(退場) (李文道) 人に願ひあれば天必ず従う、とはよく言つたものだ。俺もこうなりややつを殺つちまおう。病氣だそうだが、ねえさんに知らせるのはやめて、この葉をもつて城外へ行つてやつを毒殺してやろう。そうすれば、女房も俺のもの、銭も俺のものだ。俺の真心が通じて天も一寸だけおまんまをくれるつてわけよ。(退場)

伝言は先ず、まちがつた相手に届けられてしまうのである。高山は李徳昌との約束を忘れることも反故にすることもないのだが、道を尋ねた相手が悪かつた。李文道は、かねてからの望みをかなえるために高山から手に入れた情報を利用する。

李徳昌の伝言が正しい相手に届くのはしばらく経つてからである。上の場面に続いて劉玉娘が仏留とともに登場して、夫からは何の便りもないと述べつつ店を開く。そこへ、李文道にでたらの道を教えられてあちこち歩きまわり、へとへとになつた高山がやつてきて荷物を下ろす。「おじいさんつたら、いやね。人が商売をする場所で戸

口を塞いで（兀那老子、好不暁事。人家做買去処、你在当門做甚麼）と玉娘に文句を言われて話すうちに、それが目指す相手だとわかり、用件を伝えることができる。そのとき玉娘の息子の仏留が、高山の魔合羅をねだる。

（俵）妳妳、我要個魔合羅兒。（旦打俵科）小弟子孩兒、嗜家買菜的錢也無、那得錢來。（高）你休打孩兒、我与他一個魔合羅兒、你牢牢収着、不要壞了、底下有我的名字、道是高山塑。你父親來家呵、見了這魔合羅、我寄信不寄信、久後做個大証見里。（下）

（子ども）かあさん、魔合羅がほしいよ。（旦、子どもを打つしぐさ）この子ったら、うちにはおかずを買うお金もないのに、どこにそんなお金があるの。（高山）坊やを打つのはおやめなさい。わしがこの子に魔合羅を一つやろう。大事にして、こわすんじゃないよ。ほら、底にわしの名前があるだろう、「高山作」とな。おとうさんが帰ってきなさつてこの魔合羅を見れば、わしがちゃんと伝言したかどうか、あとでりっぱな証拠になるからな。（退場）

高山はやつと李徳昌との約束を果たすことができた。正しい相手が伝言を受け取ったのである。しかし最初の「誤配」とのあいだに経過していた時間に乗じた李文道によって、李徳昌は命を落とすことになる。劉玉娘は急いで五道將軍廟へとかけつけるのだが、李文道はすでに先回りして徳昌を診察し、薬と偽って毒を飲ませてしまっていた。ただ、徳昌はまだ生きており、玉娘は病が重くなって倒れているのだらうと考えて、連れてきたロバに乗せて急いで家に帰る。しかし家に着くと、徳昌は七つの穴から血を流して死んでしまっているのである。

⑤ 選択

動転した劉玉娘は、李文道にどうしたらいいか相談する。すると文道は、徳昌がないあいだに玉娘が間男を作り、帰ってきた徳昌を共謀して殺したのだと決めつけ、「官休」と「私休」とのどちらを選ぶかと迫る。

(李) 俺哥哥已死了、你可要官休、私休。(旦) 怎生是官休、私休。(李) 官休、我告到官司、教你与我哥哥償命、私休、你与我做了老婆便了。(旦) 你是甚麼言語。我寧死也不与你老婆。

(李文道) 兄貴が死んだとなりやあ、出るところへ出るか示談にするか。(劉玉娘) 出るところへ出るか示談かどうということ。(李文道) 出るところへ出るつてのは、俺が役所に訴えてお前が兄貴の命を償うのさ。示談なら、俺の女房になればいいぜ。(劉玉娘) なんてことを言うの。死んでも女房になんかなりません。

劉玉娘は「官休」を選び、李文道とともに役所に向かうのである。役所ではまず河南府県令に目通りし、滑稽なやりとりのあと、取調べを担当する令史が登場する。令史と文道はちょっとした顔見知りで、文道はあとで賄賂を送るからと令史に合図をしてから、劉玉娘を夫殺しで訴える。玉娘は弁明するがまったく聞き入れてもらえず、拷問を受けて自由してしまう。

(旦) 大人可憐見、小的是劉玉娘、俺男兒是李徳昌、南昌做買売去来、在城外五道將軍廟中染病。妾身尋了個頭口、直至廟中、問着不言語、取到家中、七竅迸流鮮血、驀然氣絶而死。妾身喚小叔叔来到、小叔叔説妾身有姦夫。妾身是兒女夫妻、怎下的藥殺男兒。大人、妾身並無姦夫。(令史) 不打也不招、張千、与我打着者。(張打科)(令史) 你招了罷。(旦) 小的並無姦夫。(令史) 不打不招、張千、与我打着者。(張又打科)(旦) 住住、我待不招来、我那里受的這等拷打。我且含糊招了罷、是我藥殺俺男兒来。

(劉玉娘) お役人様どうぞお慈悲を。わたくしは劉玉娘と申します。夫の李徳昌は南昌へ商売に出かけて帰る途中、城外の五道將軍廟で病にかかったのでございます。わたくしはロバを借りて急いで廟に駆けつけましたが、話しかけても答えず、家に連れ帰ったところ七つの穴からどつと血を流したかと思うと息絶えて死んでしまいました。わたくしが義弟の文道さんを呼んだところ、文道さんはわたくしに間男がいると言います。わ

たくしたちはもともとからの許婚。どうして夫を毒殺するようなひどいことをしましょうか。お役人様、わたくしには間男などございませぬ。(令史) 打たねば白状しないな。張千、打つがよい。(張千、打つしぐさ) (令史) 白状しろ。(劉玉娘) 間男などございませぬ。(令史) 打たねば白状しないな。張千、打つがよい。(張千、再び打つしぐさ) (劉玉娘) やめてください。白状などしまいと思えども、このような拷問には耐えられない。とりあえず白白してしまおう。わたくしが夫を毒殺しました。

こうして劉玉娘は枷をはめられ、死刑囚として牢獄につながれる。梟令と令史が賄賂の山分けの相談をするところで、第二折は終わる。

⑥疑惑

第三折では、まず河南府の新しい府尹(長官)が登場する。官吏の風紀が乱れているために肅正の役目を帯びて着任したのである。令史に文書を持ってこさせて調べ始めると、劉玉娘の案件である。まだ死刑囚として牢に収容されていると聞いて、府尹は劉玉娘を連れてくるよう命じる。

(孤) 取来、我再審問。(令史) 張千、去牢中提出劉玉娘来。(張) 理会的。(旦上) 哥哥喚我做甚麼。(張) 你見大人去。(令史) 兀那婦人、如今新官到任、問你。快休說甚麼。你若胡說了、我就打死你。張千、押上庁去。(張) 犯婦当面。(旦跪科) (孤) 則這個是那待報的女囚。(令史) 則他便是。(孤) 兀那女囚、你是劉玉娘。你怎生因姦藥死丈夫。恐怕前官枉錯了。你有不尽的言詞、從實說來、我与你做主咱。(旦) 小的無有詞因。(孤) 既他囚人口里無有詞因、則管問他怎麼。將筆來、我判個斬字、押出市曹、殺壞了者。(張千押旦出科) (旦) 天也、誰人与我做主也呵。

(府尹) 連れて来なさい、わしがもう一度取り調べよう。(令史) 張千、牢へ行つて劉玉娘を連れてこい。(張

千) かしこまりました。(劉玉娘登場して) にいさん、お呼びですか。(張千) お役人にお目通りだ。(令史) ころ女、新しいお役人がやってきてお前を調べるってことだが、何にも言うなよ。滅多なことを言うとな俺が打ち殺すぞ。張千、広間へ連れて行け。(張千) 犯人の女です。(劉玉娘跪くしぐさ) (府尹) これが処刑される予定の女囚か。(令史) さようございます。(府尹) これ女囚、お前が劉玉娘か。どうして間男を作り夫を毒殺などしたのじゃ。前任者のまちがいではないかとも思うが、言い足りないことがあれば、ありのままに申してみよ。わしが取りはからってやるぞ。(劉玉娘) 何も申し開きすることはございません。(府尹) 囚人に申し開きがないなら取り調べても何になろう。筆を持ってきなさい。わしが「斬」と判決を記すから、刑場に連れて行き処刑するがよい。(張千、劉玉娘を押し立てて出て行くしぐさ) (劉玉娘) ああ、誰がわたしを助けてくれるでしょう。

府尹という清官の登場によって令史という汚吏の所業が明るみに出ると期待させるが、ことは簡単には進まない。令史に恫喝されて、劉玉娘はまたしても真実を述べることができないのだ。¹⁷

この直後に現れるのが張鼎である。張鼎は六案都孔目すなわち役所の六つの部署の文書を管理する胥吏である。ちようと農村視察から帰ってきたところで、溜まった文書に府尹の署名をもらいに行く途中、門のところで処刑を待つ劉玉娘を見かけて不審に思う。

〔末〕「你看那受刑的婦人、必然冤枉、带着枷鎖、眼泪不住点兒流。聖人云、人之善惡莫良于眸子、眸子不能掩其惡。¹⁸又云、觀其言而察其行、審其罪而定其政。視其所以、觀其所由、察其所安、人焉廋哉。¹⁹」

【醋葫蘆】我孜孜的觀了一会、明明的觀了半晌。我見他不平中把冤屈暗包藏。婆娘家、怎生犯這等歹勾当、怎惹得帶枷喫棒。休休休、道不的自已枉着忙。²⁰

【么】我這里慢慢的轉過兩廊、遲遲的行至裏堂、他那里哭啼啼口內訴衷腸、我待兩三番推阻不問當。

(張) 劉玉娘、你告這個孔目哥哥、他与你做主。(且扯住末衣科) 哥哥救我咱。

(末) 他緊拽定衣服不放、不由咱須索廝²¹崑。

〔張鼎〕あの処刑されることになっている女はきつと無実にはちがいない。枷をつけられて絶えず涙を流しているではないか。聖人も「人の善悪は目に表れる、目は悪事を隠すことはできない」という。また、「言葉聞いて行いを調べ、罪を明らかにして政治を定める。その人の行いを見て、経歴を調べ、落ち着きどころを考えたら、どんな人であるかはすぐわかる」ともいうぞ。

(うた) わしはひとしきりじっくりと観察し、しばしのうちにはつきり見通した。この女は不満を抱え、無実の恨みを隠しておるぞ。この女が、どうしてこのような悪事をはたらくだろう。どうして枷をはめられ棒でたたかれることになったのか。だめだだめだ、火中の栗を拾うことになるぞ。

(うた) わしはこちらで、ゆるゆる曲がる二つの回廊、のろのろ向かう役所の広間。女はあちらで泣きながら真心を訴えるも、われしばしりごみして問いかげず。

(張千) 劉玉娘、この孔目の兄貴に話してごらん。何とかしてもらえろぞ。(劉玉娘、張鼎の衣をつかむしぐさ) にいさん、どうかお助けください。

(張鼎うた) しつかりと服をつかんで放さない。こうなればわしが話を聴かねばなるまい。

こうして張鼎はさまざま劉玉娘に話を聴く。劉玉娘は、夫がどのようにして死んだかを説明し、さらに、李文道に夫殺しとして役所に訴えられ拷問を受けたこと、それに耐えられず自白してしまったが、実際には無実であり、李文道が自分を計略にはめたのだと述べる。張鼎は、府尹に話してみようと約束し、府尹に会いにゆき、まずは本

来届けることになっていたさまざまな案件の文書について説明する。文書を提出し終わると、府尹は張鼎に十日の休暇を与え、張鼎はそのまま退出してしまう。張千に「あの一件はお話になりましたか」と言われて、劉玉娘の件を話し忘れたことに気づき、もう一度府尹に目通りする。

(孤) 張鼎、你又來說甚麼。(末) 大人、恰纔出的衙門、只見裏牆外有個受刑婦人、在那里声冤叫屈。知道的 是他貪生怕死。不知道的則道俺衙門中錯斷了公事。相公、試尋思則。(孤) 這庄事是前官斷定、蕭令史該房。

(末) 蕭令史、我須是六案都孔目、這是人命重事、怎生不教我知。 (令史) 你下鄉勸農去來、不成則管等着 你。(末) 將狀子來我看。

(府尹) 張鼎、また来たのか、何の用だ。(張鼎) 長官どの、役所を出たところでふと見れば照壁の外に処刑される予定の女がおり、冤罪を訴えております。死ぬのを恐れて何とか助かろうとしていることは確かですが、もしかすると役所のお裁きに誤りでもあったのかもしれない。どうかご検討ください。(府尹) その一件は前任者が裁きをつけた。蕭令史が担当じゃ。(張鼎) 蕭令史、わしは六案都孔目に過ぎない身だが、このよう な人命に関わる重大事件、なぜわしに知らせなかったのじゃ。(令史) 張鼎どのは農村視察にお出かけであったからじゃ。まさかずと待つているわけにもいきまい。(張鼎) 調書を見せてください。

調書には、劉玉娘が自白した内容が書かれているが、張鼎は不明な点が多すぎることを指摘する。李徳昌が持っていたはずの銀子の行方、伝言を届けてくれた者、間男、毒薬を調合した者、犯罪の計画を立てた者、いずれも判明していないのに、劉玉娘を死刑に処することはできないと主張するのである。府尹は、自分が赴任する以前に決着がついているはずの案件を持ち出されたうえ、このまま処刑するのは「いいかげんだ〔胡蘆提〕」と言われて機嫌をそこね、異議があるなら三日以内に解決するようにと張鼎に言い渡す。劉玉娘は再び死刑囚の牢に収容されて、

⑦よみがえる記憶（1）劉玉娘

第四折では、劉玉娘に対する張鼎の取調べが始まる。とにかく自分は無実だと主張するばかりの劉玉娘に、張鼎はまず夫の伝言を届けたのはどのような人物であったかと尋ねる。劉玉娘は「我忘了那個人也」「我忘了也」と繰り返すのみで思い出せない。

（末）

【幺（白鶴子）】那厮身材是長共短、肌骨兒瘦和肥。他可是面皮黑面皮黃、他可是有髭鬚無髭鬚。

（旦）我想起些兒也。

（張鼎うた）その者の背は高かったか低かったか、体つきは痩せていたか太っていたか。顔色は黒かったか黄色かったか、鬚はあったかなかったか。

（劉玉娘）少し思い出しました。

張鼎はさらに、どこに住んでいる者であったか、名前は何といったか、どうして城内に來たのか、と問いかける。そしてふと、明日は七月七日であることを口にする。

張千、明日是七月七。²³（旦）孔日哥哥、我想起來也。当年七月七、有一個売魔合羅的寄信來、又与了我一個

魔合羅兒。（末）兀那婦人、你那魔合羅有也無。如今在那里。（旦）如今在俺家堂閣板兒上放着里。（末）張千、与我取將來。

（張鼎）張千、明日は七月七日だな。（劉玉娘）お役人さん、思い出しました。あれは七月七日、魔合羅売りが伝言を届けてくれたのです。わたしに魔合羅もくれました。（張鼎）これ女、その魔合羅はあるか。今どこ

にある。(劉玉娘) うちのご先祖を祭った棚の上に置いてあります。(張鼎) 張千、取ってきてくれ。張千はすぐに魔合羅を手に戻ってくる。張鼎は真犯人を教えておくれと魔合羅に語りかける。

魔合羅、是誰殺了李德昌來。你對我說咱。

【倘秀才】枉塑你似觀音像儀、怎無那半点兒慈悲面皮。空着我盤問你、你将我不應對、我徹上下、細覷覷、到底。

(末見字科) 有了也。

【蜜姑兒】我則道在那壁、原來在這里。誰想這底座兒下包藏着殺人賊。呼左右、上塔基、誰把高山認的。

(張鼎) 魔合羅よ、李德昌を殺したのは誰だ。わしに教えてくれ。

(うた) せっかく観音様のような姿に彫つてあるのに、どうして少しも慈悲深い顔を見せてくれないのだ。問いかけてもむなしく、お前は答えてはくれぬのか。上から下までしっかりと、細かく見て、よくよく調べよう。

(張鼎、文字を見つけるしぐさ) あつたぞ。

(うた) あそこかと思いきや、なんとここにあつたとは。思いもかけずこの台座に、殺人犯が隠れておつた。左右の者を階下と呼び寄せ、誰か高山を知る者はあるか。

こうして魔合羅の底にあつた「高山作」という銘が見つかり、張千が高山を知っているというので、張鼎は連れてくるようにと命じる。

⑧よみがえる記憶(2) 高山

殺人の容疑がかかった高山が役所に連れてこられ、張鼎の取調べを受ける。高山は劉玉娘とも対面し、李德昌が亡くなったと聞いて驚き、「到是一個好人來(いいお人だったのに)」と惜しむ。張鼎はあくまでも高山を疑って問

【鬼三台】 你和他從頭里伝消息、沿路上會撞着誰。

(高) 我不會撞着人。(末) 兀那老子、比及你見劉玉娘呵、城中先見誰來。(高) 我想起來也。我入的城來、撒了一胞尿。(末) 誰問你這個來。(高) 這個是寄書的因地、我入的城時來、我會問人來、那人家門前弔着個龜蓋。(末) 敢是繫殺。(高) 是繫殺。(末) 是龜是繫。(高) 孔目直這等繫殺我也。

(張鼎うた) お前がまず伝言を届けに行くとき、途中で誰に会った。

(高山) 誰にも会っておりません。(張鼎) こらじいさん、劉玉娘に会う前に街でまず誰に会ったか。(高山) 思い出したわい。わしは街へやってくるとまず小便をしました。(張鼎) 誰もそんなことを聞いてはおらぬ。(高山) 伝言を届けるまでのいきさつじやな。街にやっていると、わしは人に道を尋ねましたわい。その人の家の入り口には龜の甲羅が掛けてありました。(張鼎) スッポンの甲羅ではなかつたか。(高山) スッポンの甲羅でした。(張鼎) 龜か、それともスッポンか。(高山) 孔目どのはまったくわしを繫殺(いらいら) させるわい。

さらに薬研も置いてあったというので、張鼎は、高山が会った相手は薬屋(Ⅱ医者)であろうと見当をつける。すると高山もこのように言う。

(高) ；他叫做甚麼賽盧医。(末) 劉玉娘、你認的賽盧医麼。(旦) 他就是我小叔叔。(末) 你叔叔可和睦麼。(旦) 俺不和睦。(末)

【鬼三台】 のつづき「聽言罷、悶漸消、添歡喜。這官司纔是實。呼左右、問端的、這医人与誰相識。

(高山) たしか賽盧医とかいう人です。(張鼎) 劉玉娘、お前は賽盧医を知っているか。(劉玉娘) わたし

の義弟です。(張鼎) お前たちの仲はいいのか。(劉玉娘) よくありません。

(張鼎うた) その言葉を聴けば、悩みは消えて、喜びを添える。この裁き、やっと現実をつかんだぞ。左右の者を呼び、問いただす、この医者を知る者あるか。

張鼎は、張千に今度は李文道を連れてくるように命令する。⁽²⁶⁾

⑨ 罨

李文道は用件を告げられないまま、張千とともに役所にやってくる。張鼎は李文道に次のようにいう。

(末) 有請。(見科) (李) 孔目哥哥、叫我有何事。(末) 老相公夫人染病、這是五兩銀子、權当藥資、休嫌少。

(張鼎) 入れ。(あいさつするしぐさ) (李文道) 孔目の兄貴、わたしに何の用でしょう。(張鼎) 長官の奥方が病気にかかられた。ここに五兩の銀子があるから、とりあえず藥代に当ててくれ。少ないがなんとか。

張鼎が症状を説明すると、李文道は持ち合わせている藥を飲ませようと言う。

(李) 我隨身帶着藥、拿与老夫人吃去。(張) 将来、我送去。(做送藥回科) (末) 張千、你看老夫人吃藥如何。

(張) 理会的。(下) (隨上) 孔目哥哥、老夫人吃了藥、七竅迸流鮮血死了也。(末) 賽盧医、你聽得麼。老夫人吃下藥、七竅迸流鮮血死了也。(李) 孔目哥哥、救我咱。(末) 我如今出脱你、你家里有甚麼人。(李) 我有个老子。(末) 多大年紀了。(李) 俺老子八十歲了。(末) 老不加刑、則是罰贖。賽盧医、你若捨的你老子、我便出脱的你。你若捨不的呵、出脱不的你。(李) 謝了哥哥。(末) 我如今說与你。我便道、賽盧医。你說、小的。

我便道、誰合毒藥來。我便道、是俺老子來。我便道、誰生情造意來。我便道、是俺老子來。我便道、誰拿銀子來。我便道、是俺老子來。我便道、不是你麼。我便道、並不干小的事。你這般說、纔出脱的你。(李) 謝了哥哥。

(李文道) わたしは薬を持っておりませう、奥方に飲んでいただきます。 (張千) 渡せ、わしが持つていく。(薬を持って戻ってくるしぐさ) (張鼎) 張千、奥方は薬を飲んでどうなったか見てこい。(張千) かしこまりました。(退場) (次いで登場) 孔目の兄貴、奥方は薬を飲んで、七つの穴から血を流して死んでしまわれました。(張鼎) 賽盧医、聴いたか。奥方は薬を飲んだあと七つの穴から血を流して死んでしまわれたぞ。(李文道) 孔目の兄貴、お助けください。(張鼎) お前を助けてやろうと思うが、家には誰がいる。(李文道) おやじがおります。(張鼎) いくつじや。(李文道) 親父は八十になりました。(張鼎) 老人には刑を加えず、罰金のみじや。賽盧医、お前がおやじを身代わりにするなら救ってやろう。それができぬなら救えぬな。(李文道) 恩に着ます、兄貴。(張鼎) いいか、よく聴け。わしが「賽盧医」と言ったら、お前は「わたくしです」と言う。わしが「誰が毒薬を調合した」と言ったら、お前は「おやじがしました」。わしが「誰が思いついた」と言ったら、お前は「おやじです」。わしが「誰が銀子を手に入れた」と言ったら、お前は「おやじです」。わしが「お前ではないのだな」と言ったら「わたしには関わりのないことです」。このように言ったら救ってやろう。(李文道) ありがとうございます、兄貴。

長官の奥方が死んだというのは、張鼎が考えた罠である。李文道はまんまとこの罠にかかり、老人には刑を加えず罰金で償わせるといので、これ幸いと父親に罪をなすりつけようとする。張鼎は、問答の打ち合わせまでしうえで、張千に李彦実を呼んでくるように命じる。李彦実がやってくると、文道とは対面させないまま、張鼎と文道が打ち合わせどおりに上記の問答を行い、それを彦実に聞かせる。この問答が長官の奥方の一件についてのものと知らない李彦実は、文道が李徳昌殺害の罪を自分に着せようとしていると思ひ込み、犯人は息子だと言ってしまう。そして息子と対面する。

(李老打文道科云) 葉殺哥哥也是你、都是你来、都是你来。(李) 不是、我招的是葉殺夫人的事。(李老) 呀、我可將葉殺哥哥的事都招了也。(李) 招了也、咱死去来、老弟子孩兒。

(李彦実、文道を打つしぐさ、せりふ) 従兄を毒殺したのはお前だ、みんなお前がしたことじゃないか。(李文道) ちがうよ、俺が白状したのは奥方を毒殺した話だ。(李彦実) あれ、わしは従兄を毒殺したことをすっかり白状してしまつたぞ。(李文道) 白状したのか。俺はもうおしまいだ、この老いぼれめ。

こうして真相は明らかになった。張鼎はこのことを府尹に報告し、府尹から判決が言い渡される。

(孤) 這庄事老夫已知了也、一行人聽我下断。本処官吏不才、杖一百永叙用。李彦実主家不正、杖八十、年老罰鈔贖罪。劉玉娘屈受拷訊、將家財永遠為主、請勅旌表門庭。李文道謀殺兄長、押赴市曹処斬。老夫分三個月俸錢、重賞張鼎。

(府尹) 本件について、わしはすでに承知したぞ。皆わしの判決を聴け。本署の官吏は無能であるため、杖刑百回に処して永久に罷免する。李彦実は家をしつかり治めない咎で杖刑八十回のところ、老齢により罰金にて償わせる。劉玉娘は拷問を受けた代償として、家財の永久的な所有主とし、朝廷にお願いして旌門を建てて当家を顕彰する。李文道は従兄を謀殺した罪で刑場に護送して処刑する。わしは三ヶ月分の俸給を割いて張鼎の賞与とする。

こうして一件落着となるのである。

三 構造の類型化——「勘頭巾」

以上見てきたように、「魔合羅」は殺人事件をめぐる冤罪が張鼎の推理によって晴らされる劇である。魔合羅という証拠の品とそこに刻まれていた文字が手がかりとなり、記憶をたどることによって人物たちがつながり、真犯人がつきとめられる。そしてさらに、畏によって引き出された真犯人の自白が決定的な証拠となる。その論理的な整合性はあざやかなものといえるだろう。

また、劇の展開においては、観客に期待を持たせておいてはぐらかしたりじらしたりする場面がいくつか配置されることよって、適度な緊張が保たれ、単純さを免れている。高山が三つの戒を守っているからといったんは李徳昌の頼みを断つたり、新しい府尹が着任したところで解決へ向かうのかと思うとそうではなかったり、張鼎が府尹に肝心な用件を言い忘れたりという場面、そして何よりも劉玉娘や高山が、重要な人物のことをなかなか思い出せない場面である。

さらに、後述するように役人たちの滑稽な要素も加わって、笑いのうちにも批判性を感じさせる興行きのある劇となっている。

さて、このような「魔合羅」の構造を一つの類型として利用することによって「勘頭巾」が作られたのではないか、というのが本稿の仮説である。それではまず、「勘頭巾」のあらすじを述べよう。²⁹⁾

・第一折（正末は劉平遠、場所は劉員外の家の前）…

貧乏な与太者の王小二は、劉員外（劉平遠）の家にたかりに来て、員外を外に呼び出すために犬に向かって瓦を

投げが、狙いがはずれて水がめをこわし、出てきた奥方と口論になる。次いで劉平遠が出てくると、王小二は「前の犬に咬まれた」と言いがかりをつけて罵りあいになり、王は劉に「人通りの少ないところで出くわしたら殺してやるぞ」とすごむ。それを聞いた奥方は王小二に、百日以内に夫の身に何かあったら王の責任であるという証文を書かせる。

・第二折（正末は前半が劉平遠・後半は張鼎、場所は前半が劉員外の家、後半は役所）…

劉員外の奥方は太清庵の道士王知観と密通している。王小二に証文を書かせたのを利用して夫を殺して王知観と一緒にしろと考へ、王知観を呼んで、劉員外が借金の取立てに出かける折にその帰り道を狙って員外を殺し、証拠の品として頭巾と輪飾りを持ち帰るようにと頼む。王知観は言われた通りにする。奥方は証文をたてに王小二を連れて役所へ訴え出る。³¹⁾

役所では趙令史が劉員外の奥方の訴えを聞いて王小二を拷問し、王は耐えられずに虚偽の自白をして牢に入れられる。さらに員外の頭巾と輪飾りのありかをめぐって拷問されてまたもや耐えられず、思いつきでたためな隠し場所（とある井戸のそばの石板の下）を言う。たまたま牢に藁売りの田舎者が来ていてそれを耳にする。そのあと藁売りはたまたま道で道士（実は王知観）に出会い、焼餅をくれた道士に役所で耳にしたことを詳しく話す。それを聞いた王知観は頭巾と輪飾りを王小二の話した隠し場所に置きに行き、令史の命令で証拠の品を探してきた張千がそれを見つけて役所に持ち帰る。役所の風紀肅正のためにやってきた新任の河南府尹が登場し、令史に文書を持ってこさせて王小二の案件を再調査する。しかし王小二は令史に脅迫されていて本当のことが言えない。府尹は疑問を抱きつつも「斬」の文字を記す。そこへ張鼎が登場して、門のところへ刑場へ護送されるのを待っている王小二を見とがめて、府尹に疑問を呈する。証拠品の頭巾と輪飾りを調べてみると、半年のあいだ現場にあったにし

てはきれいなのを不審に思い、令史が賄賂を受け取って事実を曲げたのではないかと疑う。府尹は三日以内に決着をつけるよう、張鼎に命じる。

・第三折（正末は張鼎、場所は役所）…

張鼎は獄中の王小二を訪ねて話を聞く。王小二は劉員外の家の前でのいさかいや百日の証文のことを述べる。張鼎は、王小二が無実ならなぜ頭巾と輪飾りの場所を知っていたのか、不審に思う。すると張千が、王小二に隠し場所を白状させたとき、藁売りがそれを聞いていたことを思い出す。張千に藁売りを連れてこさせて話すうちに、藁売りは張鼎がたまたま口にした「焼餅」という言葉を聞いて道士と会ったことを思い出す。張千も証拠の品を取りに行ったとき道士を見かけていた。張鼎は、員外の奥方があやしいと見て召喚する。張鼎は道士はもう捕まえてあると奥方をだまし、藁売りに囚人帽をかぶせて質問し、首を縦に振るか横に振るかで答えさせる。これを王知観であると思ひ込んだ奥方は王知観の名を口にしてしまう。王知観も召喚され、最初は否認するが拷問されて罪を認める。

・第四折（同上）…

張鼎が府尹にこの案件の報告をし、府尹の判決が下る。真犯人の二人は死刑、その他の関係者にもそれぞれ賞罰が与えられる。

以上のようにあらずじをただただだけでも、特に後半において、「魔合羅」と似ているという印象は否めないであろう。しかし、二作品は全くちがうように見える前半を含めて、三角関係↓殺人↓冤罪↓解決という同型の構造を具えており、その構造に、前半では異なる内容が盛りこまれ、後半では内容的にも類似性が高いということにす

ぎない。このことをもう少し詳しく説明しよう。

① 三角関係

劇はいずれも、一組の夫婦と一人の男との三角関係から始まる。「魔合羅」では、李文道が従兄李徳昌の妻である劉玉娘に横恋慕しており、「勘頭巾」では、劉平遠の妻が道士の王知観と密通しているのである。つまり、前者では夫婦の仲は円満で、李文道の思いは一方的なものであるが、後者では夫婦の仲は破綻しており、夫の劉平遠は気づいていないようであるが、奥方は夫を殺したいほどに王知観にぞっこんである。

したがって、「魔合羅」においては、三人がそれぞれ犯人・犠牲者・冤罪者となり、李文道はありもしない劉玉娘の間男をでっちあげる。一方、「勘頭巾」では、道士は実際に奥方の間男であり実行犯であるため、罪を着せるのは三人以外の者とならざるを得ない。

② 殺されるのは帰り道

「魔合羅」で李徳昌が殺されるのは、百日の行商に出かけてかなりの売上金を手に家に帰る途中、病気で寝ていたときである。「勘頭巾」では劉員外が殺されるのは借金を取立てに行つて帰る途中、酔っぱらったので馬から下りて柳の木の下で寝込んでいたときである。李文道は当然のように徳昌の売上金も奪って逃げる。王知観の場合、員外が所持していたであろう金銭についての言及はないが、頭巾と輪飾りを取って逃げる。行商の旅の帰り道と一日出かけただけの帰り道の差はあるものの、李徳昌が殺された廟も劉玉娘がロバを連れて迎えに行くことから考えると、いずれも家からそれほど遠くない人気のない場所であるといえるだろう。

③ 鍵になる人物

事件解決の鍵になる人物はいずれも行商人である。商品を携えて移動する行商人だからこそ、事件の当事者であ

る家族と本来関わりのない彼らが重要な鍵となるのである。「魔合羅」の魔合羅売りは、たまたま五道將軍廟で雨宿りをしたのをきっかけに、李徳昌と出会うがそのことづてを李文道に伝えてしまう。「勘頭巾」の藁売りはたまたま牢に藁を売りにきて王小二の虚偽の自白を聞き、その言葉を王知観に伝えてしまう。「魔合羅」ではそれが殺人を引き起こし、「勘頭巾」ではすでに起こった殺人の真犯人による擬装工作を引き起こす。二人とも、それとは知らず最も話してはいけない相手に話してしまうのである。

また、魔合羅売りは、李徳昌・李文道・劉玉娘に次々に出会うことによって、劇の前半から真犯人判明までを貫く糸としての役割を果たしている。一方、「勘頭巾」の藁売りは、殺人そのものとは関わらず、役所で張鼎が真犯人にしかける罠の一端を担うなど、劇の後半で活躍する。

④証拠の品

「魔合羅」では高山にもらった魔合羅が劉玉娘の家にあったこと、「勘頭巾」では員外の頭巾と輪飾りが故意にある場所に置かれたことが解決の手がかりになる。つまり、どちらもある品物が証拠となるわけだが、魔合羅が劉玉娘の家の棚の上に置かれたのは、息子の仏留がそれをほしいとねだったからであり、きちんと伝言を届けたという証拠にもなるからであって、いずれにしても高山の善意のしるしである。一方「勘頭巾」で頭巾と輪飾りがとある井戸のそばの石板の下に置かれたのは、王小二の虚偽の自白を知った真犯人王知観がつじつまを合わせて王小二の容疑を確かなものにするためであり、明らかに悪意から出たものである。

⑤記憶の糸

「魔合羅」では、張鼎が事件に疑問を抱いて取調べを行ううちに、劉玉娘は夫が病気であると知らせてくれたのが魔合羅売りであったことを思い出す。「勘頭巾」では、王小二ではなく役所の張千が、王が証拠の品の隠し場所

を自白したときに藁売りがそれを聞いていたことを思い出す。このあと、解決までの過程は次々と記憶の糸をたぐりよせることよって展開する。「魔合羅」では、まず劉玉娘の家の魔合羅を取つてきて「高山作」の銘を見つけて、高山を連れてきて問うと、李文道と話したことを思い出す。そこで李文道を召喚するわけである。「勘頭巾」の場合は、藁売りを連れてきて張鼎があれこれ尋ねるうちに、証拠の品のありかを道士に話したことを思い出す。そこで張鼎はまず員外の妻を召喚する。

⑥ 自白を誘う罫

張鼎はあくまでも真犯人の自白を引き出そうとして、そのために罫をしかける。「魔合羅」では、李文道を呼んだ用件が藁の処方であると思わせ、病人がその藁で死んだと一芝居打つのである。これは実際に李文道が犯した殺人の反復でもある。そして父親に罪を着せるように誘導して、まず父親が馬脚を現し、文道もつられて本当のことを言ってしまう。「勘頭巾」では、員外の妻に道士はもう捕まえてあると言い、藁売りに囚帽をかぶせてこれを道士と思わせて問答をくりかえすうち、員外の妻は思わず王知観の名を口にしてしまう。そこで王知観も連れてこられて白状する。

四 入れ子構造

さらに前節では触れなかつた類似点がある。役所の場面における役人たちの滑稽なやりとりである。劇の本筋とは関わりがないが、入れ子のようにはめ込まれているもう一つの劇。これが金の院本（単純なフアルス形式の演劇）の形式の継承であると考えられることについては、つとに田中謙二による論考がある。⁽³²⁾特に「魔合羅」の役所

の場面は、裁判劇の多くに共通する類型の代表とされ、三つの要素が指摘されている。

(一) 官人(孤)が告訴人にむかつて土下座(跪)し、部下の廷吏にたしなめられる。

(二) 官人は無能のため、外郎(令史)を呼んで裁判を委任する。

(三) 裁判を委任された外郎は原告から賄賂をとり、拷問によつて被告に無実の供述を強い、死刑を宣告する。⁽³³⁾

「魔合羅」と「勘頭巾」の二作品のみについていえば、このあとの手続きも共通している。すなわち、別の官人(府尹)が役人の風紀肅正のために着任し、冤罪者を取り調べるが冤罪者は令史に脅かされていて本当のことが言えない。刑場に送られることになって待機しているとところに六案都孔目の張鼎がやつてきてこれを見とがめる。張鼎はそれを府尹に報告に行くが、他の文書についての報告が終わつて休暇をもらうと、そのまま帰ろうとする。張千に指摘されて報告を忘れたことに気づき、もう一度府尹のところに行く。府尹と令史は機嫌をそこね、張鼎に三日以内に解決するように命じる。

あとからやつてくる府尹が「完顔女直人氏」であることも共通しており、それぞれの場面ではせりふまでがほぼ同一である。たとえば「魔合羅」で、張鼎が三日以内に解決するようにと命じられることになる場面を見てみよう。

【醋葫蘆】(…) 可怎生葫蘆提推擁他上雲陽。

大人你好葫蘆提也。⁽³⁴⁾ (令史) 大人爺爺、張鼎罵你葫蘆提。(孤) 張鼎、阿誰葫蘆提。(令史) 張鼎說大人葫蘆提。(孤) 張鼎、阿誰葫蘆提。(末跪科) (孤) 我纔理任三日、你說我葫蘆提。

(張鼎うた) (…) どうしてでたらめに刑場へ送つてよいものか。

(せりふ) 長官これではでたらめです。(令史) 長官どの、張鼎は長官どののをでたらめと罵りましたぞ。(府尹) 張鼎、誰がでたらめだと。(令史) 張鼎は長官どののをでたらめと言いました。(府尹) 張鼎、誰がで

らめだと。(張鼎、跪くしぐさ)(府尹) わしはまだ赴任して三日目なのに、わしをでたらめと言うのか。後ろめたいところがある令史が、張鼎が口にした「葫蘆提」という言葉をとらえて府尹の怒りをかきたてた結果、三日という期限が定められるのであるが、これも「勘頭巾」と共通である。

果たしてどこまでが院本の形式と関わるのかという問題は措くとして、役所の場面が前節の⑤⑥を含めて同じ構造を持つことは明らかであろう。

五 構造からの生成

元雜劇のうち、張鼎による裁判の劇は「魔合羅」と「勘頭巾」の二作のみであり、古名家本や元曲選本によれば「魔合羅」は孟漢卿撰、「勘頭巾」は孫仲章撰である。元末の人である鍾嗣成の「録鬼簿」³⁵は二人を「前輩已死名公才人有所編傳奇于世者」として載せているが、伝記的記述はなく、孟漢卿については「亳州人」、孫仲章については「大都人。或云李仲章」と記すのみである。しかも、孟漢卿の作品としては「張鼎智勘魔合羅」を載せるものの、孫仲章の作品には「勘頭巾」は含まれていない。一方で、「方今才人相知者、紀其姓名行実并所編」の一人である陸登善の作品として「張鼎勘頭巾」を載せているが、これが現在伝わる「勘頭巾」とどのような関係にあるのかは不明である。したがって、この二作品の前後関係・影響関係について、テキスト以外に根拠とすべきものは存在しないといえよう。

『録鬼簿』にもあるように、元雜劇の作者は「才人」と呼ばれ、「書会才人」という用例もあることから、「才人」は「書会」という組織を形成していたと考えられている。³⁶さらに、雜劇ではないが、「永楽大典戲文」として伝わ

る三種の戯曲は書会あるいは才人の作とされている。「宦門子弟錯立身」は古杭才人新編、「小孫屠」は古杭書会編撰と題され、「張協状元」は劇中で九山書会の編と称するのである。³⁷古杭は杭州、九山は永嘉でいずれも南方であるが、『録鬼簿』を増補した明初の賈仲明が「…録鬼簿載其前輩玉京書会、燕趙才人、四方名公士夫、編撰当代時行伝奇楽章隱語」と書いている（『書録鬼簿後』）ことから、「玉京」すなわち大都にも書会があり、戯曲を提供していたと考えられる。大都市においては新作への需要も多かったであろう。³⁸

そこで、本稿で「魔合羅」と「勘頭巾」について検討してきたことを手がかりに元雑劇の作品がどのように作られたのか、その手法の一つの可能性について考えてみたい。

中国において前近代の小説や戯曲は、歴史故事を語り直すこと、そしてそれを反復することによって新たな物語を生み出してきた。³⁹たとえば、ある出来事が小説として記録され、さらにそのヴァリエーションとして語り直される。ある場合には語り物として、またある場合には戯曲として編成されることにもなる。このような語り直しは、文言と白話とのちがいをも越えて繰り返されてきた。

「魔合羅」と「勘頭巾」についても、「魔合羅」が先に作られ、「勘頭巾」はその一つのヴァリエーションであると考えることができるのではないか。本稿第三節で見たように、「魔合羅」という劇は、一組の円満な夫婦と、その妻に横恋慕する従弟との関係を出発点としていた。この関係を少しずらすことによって別の劇を作ることができるとも。もしも夫婦が円満ではなく、妻に愛人がいたとしたら。夫を殺すのは、横恋慕する従弟から妻の愛人に入れ替わる。そして新たな劇が展開し始める。殺人の罪を誰に着せるか、それはいかにして晴らされるか。論理の要請にしたがって登場人物が作られることになるが、劇の展開は「魔合羅」と同じ構造とその論理によって規制されている。役所の場面はほとんど「魔合羅」の類型を踏襲する。このようにしてできあがったのが「勘頭巾」ではないだ

ろうか。そして、二つを比べたときの「勘頭巾」の稚拙さは、まさにこの構造を利用したことによって無理が生じているためではないだろうか。

「魔合羅」がはぐらかしたりじらしたりといった、劇の展開を遅らせる要素をうまく配置して緊張を保っていることにはすでに触れたが、「勘頭巾」は逆に、すべてが滞りなく運びすぎる嫌いがある。王小二に証文を書かせた劉員外の奥方は早速に殺人計画を立て、その実行を依頼された王知観は指図どおりに員外を殺す。何もかもがとんとん拍子に進む。しかも、「魔合羅」において賽盧医が薬と偽って毒を飲ませるという方法は必然性を感じさせるが、「勘頭巾」では王知観が員外を殺した方法については全く描かれていない。員外は眠っていたので、絞殺か撲殺であろうと思われるものの、ト書きには「王知観、登場して劉員外を殺すしぐさ」、そのあとのせりふには「殺したぞ」とあるのみで具体的なことは何もわからないのである。王小二が牢に入れられたあとも、薬売りはあまりにも都合よく王知観に出会って、牢で小耳に挟んだ情報を漏らし、王知観はすぐさま証拠の品を置きに行く。言葉は常に正確に伝達される、そのことが逆説的にぎこちなさとなっているのである。

ところで、二作品にはこれまで言及した以外にも、些細な一致が見られる箇所がある。まず、冒頭箇所での「百日」。「魔合羅」で、李徳昌が旅に出るのは、占いで「一百日災難（百日以内に災難）」があると言われたためである。一方、「勘頭巾」で員外の妻は「二百日以里（百日以内）」に員外の身に何かあったら王小二の責任という証文をとる。次に、最後に張鼎が真犯人を罫にかけるところの「五両」である。「魔合羅」で張鼎は、李文道に「老相公夫人染病、這是五両銀子、権当葉資、休嫌少」と言う。「勘頭巾」では張鼎は、員外の妻に「我如今替你逐脱了這庄事、你怎生相謝我」と尋ね、妻は「我送五両銀子与孔目買茶里」と答えるのである。さらに、「焼餅」がある。あらすじで触れたように「勘頭巾」では薬売りが道士に焼餅をもらうのだが、「魔合羅」にもちらりと「焼餅」と

いう語が現れる。第四折で劉玉娘が取調べのために張鼎に枷を解いてもらったとき、これで自由の身になったと早合点して「謝了孔目、我改日送焼餅盒児来」とお礼を言うのである。これは「勘頭巾」における「五両」の場面と似ているではないか。これらは全く瑣末な一致ではあるが、対称移動のようにして、あるいはそれをさらに少しずらして、「魔合羅」から「勘頭巾」に取り入れられた要素であるかもしれない。

ある作品の構造が、別の作品を生み出すこと。これは広く中国の小説・戯曲（に限らないのだが）に見られる現象であり、元雑劇という範疇のうちにあつてもさまざまなスケールで既成の要素が利用されている。本稿では、張鼎が裁きを下す二つの劇を比較検討し、それらの構造が全体として同型であることを明らかにした。書会などで元雑劇が盛んに制作され提供され、新しい作品への需要が高まっていたときに、評判の高い作品の構造や、その構造内の要素を利用して新たな作品が制作されたと推測することはそれほど外的外れではないだろう。「魔合羅」と「勘頭巾」は、ある戯曲の構造のうちのいくつかの要素をずらしたり反転させたりすることによって別の戯曲が生成することを、あるいはそのような戯曲制作の手法の可能性を示しているのではないだろうか。

おわりに

元曲の裁判劇において、裁判官が自らの能力によって事件を解決するのではなく、死者の亡霊や夢など「外的な力」の助けを借りて真実を明らかにすることが多いのは、演劇が死者の鎮魂と関わっていることを考えれば不思議はない。⁴⁰誰が犯人であるかは、観客／読者には事件が起きたときにすでにわかっており、推理によって真実を明らかにするまでもない。しかし劇中の人物たちは、事件現場にいた犯人とすでに死んでしまった被害者を除いて、こ

との真相を知らない。そして、もちろん犯人が本当のことを言うはずはない。そこで、現実には語ることでできない死者が亡霊として真実を語り、裁判の誤りが正されることによって、同類の死者たちを慰撫し救済するというのが、鎮魂劇の役割であった。⁴¹

しかしながら、「魔合羅」においては救われるのはあくまで冤罪で死刑囚として牢につながれた劉玉娘であって、殺された李徳昌ではない。李徳昌は死んでしまった時点で物語の外へ出てしまうのであり、劇の後の展開になんら影響を及ぼすことはない。最後に府尹から判決がいわたされ、関係者に賞罰が下される場面でも、李徳昌への言及は全くないのである。

これは、もともとは鎮魂のために必要とされた裁判劇の構造が、鎮魂という目的から独立して作品を生み出しているということではないだろうか。鎮魂から離れても、その裁判劇としての構造は、真実を明らかにするための論理的手続きを要請する。その論理性が、あたかも現代における法廷劇あるいは推理劇のような作品を成立させているのだ。⁴²

だが、一方ではこのようにも考えられるのではないか。死者となった李徳昌はもはや人物として劇に登場することはないが、その死をめぐる真実こそが亡霊となって劇中をさまよっているのだ、と。真実は、劇の外にいる観客／読者にはわかっていても、劇中ではなかなか到達できないものとして先送りにされる。伝言の誤配によってたらされた死が、さらに真実を誤配し、真実は言葉にされることもなく忘却されたまま宙をさまよう。張鼎は、論理の力によってその真実を明らかにし、判決として言明する。真実が言葉によって伝達されることで劇は終わるのである。忘却される危機にある真実（＝死者）の亡霊を伝達不可能性から救う劇——だとすれば、これもまた一つの鎮魂劇なのかもしれない。

注

- (1) 岩城秀夫「元の裁判劇における包拯の特異性」〔中国戯曲演劇研究〕、創文社、一九七三、四七九頁。
- (2) 同上、四七六頁。
- (3) 吉川幸次郎「元雜劇研究」〔吉川幸次郎全集〕第十四卷、筑摩書房、一九六八)は、元代後期の雜劇が「遅まじさを失った」原因の一つは「摸倣の盛行」であると指摘する。また、前期の作品においても「摸倣の現象」は存在し、二つの作品の「いずれが先であるかは判別し難いが、結構は酷似する」例を列挙したなかに、この二種も入っている(二七〇頁)。また、元雜劇のなかの冤罪事件の類型化について論じたものとして、村上公一「元曲公案劇の構成―事件・人物関係・配役―」〔福井大学国語国文学30、一九九一〕がある。
- (4) 現存する本劇のテキストには、元刊雜劇三十種本(以下、元刊本と略す)・脈望館古名家雜劇本(以下、古名家本と略す)・元曲選本・醉江集本がある。元刊本にはせりふが極端に少ないうえ、比較検討する「勘頭巾」には元刊本はない。元曲選本が臧懋循によって改編されていることは周知のとおりである。古名家本は元曲選本よりも古く、曲辞もより元刊本に近い。そこで、以下の引用は古名家本に拠り、版本間の文字の異同については主要なもののみ注記する。日本語訳には二種あり、青木正児「元人雜劇」(春秋社、一九五七)「青木正児全集」第四卷(春秋社、一九七三)所収)および池田大伍訳・田中謙二補注「元曲五種」(平凡社東洋文庫、一九七五)に収められている。底本はいずれも元曲選本である。なお、あらずじを述べるにあたっては、主要人物が最初に登場するところのみ、人物名に傍線を引くこととする。
- (5) 「賽盧医」とは、春秋時代の名医扁鵲(盧の国に住んでいたので盧医と称す)に匹敵するほどの名医という意味だが、元雜劇ではつねにやぶ医者であり薬屋でもある。
- (6) 元曲選本では「楔子」で、以下が「第一折」である。
- (7) 原文は「頭口」。ロバや馬などの家畜を指し、どちらか特定はできないが、便宜上「ロバ」と訳す。
- (8) 元曲選本では「千里」に作る。「百里」では近すぎるといふ臧懋循の判断か。
- (9) 以上の①②については、村上公一「元曲公案劇の構成―事件への手続き―」〔早稲田大学教育学部学術研究「外国語・外国文学編」47、一九九九〕がすでに指摘している。
- (10) 高山は日ごろから「一不与人家作媒、二不与人家做保、三不与人家寄信」という三つの戒を守っていることを理由に最初はこの依頼を断るが、命に関わることでもあるので結局引き受ける。ちなみに、元雜劇「宋太守風雪漁樵記」の張徹古も、この三つ

の戒律を守っている。元の雜劇や散曲に登場する張徹古という人物について論じたものに、金文京「元曲中の張徹古について」(藝文研究87、二〇〇四)がある。

- (11) 曲文は元曲選本とほぼ同じであるが、最後の句については、元刊本が「交他早些兒扶策我這病身軀」、元曲選本では「教他早些來把我這病人扶」に作るので、元刊本に近い。なお、元刊本のテキストは徐沁君校『新校元刊雜劇三十種』(中華書局、一九八〇)に拠る。

(12) 元曲選本には「則除是這般」はない。

(13) 元曲選本には「我則這等也要所算他里」はない。

(14) ここに「做」字がないのは脱字か。元曲選本ではこの句を「我寧死也不与你做老婆」に作る。

(15) これについては後述する。

(16) 明記されていないが、第二折の終わりで劉玉娘が囚人となってから第三折が始まるまでのあいだには、一年という時間が経過している。このことは第四折にならないとわからない。

(17) この点については、村上公一「元曲公案劇の構成―釈冤への手続き―」(名古屋大学中国語学文学論集10、一九九七)がすでに論じている。

(18) 孟子離婁上…孟子曰、存乎人者、莫良於眸子、眸子不能掩其惡。胸中正則眸子瞭焉、胸不正則眸子眊焉。聽其言也、觀其眸子、人焉廋哉。「聖人云、人之善惡」を元曲選本では「古人云、存乎人者」に作る。

(19) 論語為政…子曰、視其所以、觀其所由、察其所安、人焉廋哉、人焉廋哉。元曲選本にはこの「論語」の引用部分はない。

(20) 元曲選本では、この曲の「冤屈」を「心事」に作り、「怎生犯這等歹勾当」は「怎生遭這般冤屈網」に作る(古名家本は元刊本に近い)。

(21) 元曲選本では最後の句(元刊本と同じ)を「不由咱不与你做商量」に作る。

(22) 元曲選本ではこの令史のせりふを「你下鄉勸農去了、難道你一年不回、我則管等着你」に作る。

(23) 元刊本では、張鼎が劉玉娘に伝言が届けられたのは何日か尋ねて、劉玉娘がそれに七月七日と答え(この部分は明記されていない)、張鼎が「七月七日だな」と確認してその人物が何らかの物売りではなかったか、次の曲で問いかけていくという流れになっている。原文は、「正末」做尋思了。云、是幾日寄信來。(旦云)正末云、是七月七日。元曲選本では、張鼎が唐突に張千に明日は何日か尋ね、張千が答えるというやりとりとなっている。原文は、「正末」云、張千、明日是甚日。(張千云)明日是

七月七。

(24) 「這個是寄書的因地」は元曲選本にはない。

(25) このあと元曲選本では「高」是鰲。 (末) 是龟是鰲」のやりとりはない。また、高山の最後のせりふに「孔目」の二字はない。

(26) 「鬼三台」の曲の後で、張鼎は魔合羅を作った罪で高山を棒たき八十回の刑に処し、高山は「魔合羅を作って八十回打たれるなら、金剛でも作つたら頭を打ち割られるな」というせりふを述べて退場する。魔合羅は七夕に家々で飾って願いをかける人形であり (一方でその名には仏教的由来もある)、宋代以来流行していた。それを作ったことがなぜ罰せられるのか (それとも笑いとるためのふざけなのか)、よくわからない。胡適「魔合羅」(天津「益世報」「読書週刊」第一期、一九三五年六月六日)「胡適古典文学研究論集」(上海古籍出版社、一九八八)所収」によれば、魔合羅とは仏教の魔訶迦羅に由来し、密教では戦いの神である大黒天、顕教では福神である大黒神となった。後者は女性として形象化されるようになったため、魔合羅も観音像に似た姿であった。胡適は、「魔合羅」雜劇で魔合羅を作ることが処罰の対象になっているのは、魔合羅という名が、十三世紀末ごろから祭られるようになった密教の戦闘神と同じであるため、ラマ教から警戒されたのではないかと推測している (元王朝はチベット仏教を厚く保護した)。一方で小林太市郎「七夕と魔合羅考(上)」(支那仏教史学 4-3、一九四〇)は、この処罰について「恐らく魔合羅売などは、当時正常な人民としての取扱を受けなかつたのであらう」(二十六頁)と述べている。

(27) 元曲選本ではこのあとに「謀取財物也是你、強逼嫂嫂私休也是你」が入る。

(28) 元曲選本には「将家財永遠為主」はない。

(29) 本劇の現存テキストには、古名家本・元曲選本がある。本稿は古名家本に拠る。

(30) 原文は「減鉄環子」(元曲選本では「減銀環子」)。「老吃大」には帯の種類として「減鉄」の語が現れるが、金文京・玄幸子・佐藤晴彦訳注「老吃大」(平凡社東洋文庫、二〇〇二)、三〇一頁訳注にもあるように詳しいことは不明。王学奇主編「元曲選校注」(河北教育出版社、一九九四)、第二冊一七七〇頁の注は「環子」を「帽子を固定するための飾りの金属の輪」とするが疑問も残るので、本稿では仮に「輪飾り」と訳す。

(31) 元曲選本ではここまでは「楔子」で、以下が第二折である。

(32) 田中謙二「院本考——その演劇理念の志向するもの——」(日本中国学会報 20、一九六八)「田中謙二著作集」第一卷(汲古書院、二〇〇〇)所収。関連する論文として、岩城秀夫「中国古典劇の研究」(創文社、一九八六)第一部第三章「道化役の扮

- 装」、村上公。「元曲公案劇の構成——冤罪への手続き——」（福井大学教育学部紀要Ⅰ「人文科学 国語学・国文学・中国学 編」40、一九九二）がある。
- (33) 田中謙三前掲論文、一八〇頁「著作集では七十三頁」。この場面の官人を「孤」と表記するのは元曲選本で、古名家本では役柄のみ記す（「魔合羅」では浄で県令、「勘頭巾」では外で府尹）。あとで登場するもう一人の官人は古名家本でも「孤」（二作品とも府尹）。「魔合羅」はこの三つの要素を兼ねそなえており、「勘頭巾」は（一）を欠くが、代わりに官人が令史に対して跪いてたしなめられる。
- (34) 元曲選本には、曲のあとのこの張鼎のせりふはない。
- (35) 『中国古典戯曲論著集成』本による。
- (36) 「書会」の語はすでに南宋時代の杭州に関する文献『都城紀勝』『武林旧事』などに見える。書会が制作・提供していたのは戯曲に限定されない。詳しくは、青木正兄『支那近世戯曲史』第五章「復興期に於ける南戯」第一節「『永楽大典』本戯文三種」『青木正兄全集』第三卷、春秋社、一九七三、七十五頁）を参照。
- (37) 南戯の最古の版本である成化本『白兔記』も、劇中で「永嘉書会才人」の作であると称する。詳しくは、大阪大学中国文学研究室編『成化本『白兔記』の研究』（汲古書院、二〇〇六）を参照。
- (38) 書会が元雜劇の隆盛をもたらしたことについては、孫楷第「元曲新考」（『世説園古今雜劇考』、上雜出版社、一九五三）の「書会」の項（三八八―三九五頁）を参照。
- (39) 拙論「反復される語り——古代中国における「説」と「小説」」（『専修人文論集77、二〇〇五）は漢代までの古い時代についてはあるが、この問題を論じている。
- (40) 田中一成『中国演劇史』（東京大学出版会、一九九八）第四章「元代演劇の形成」第一節「鄉村祭祀に由来する元代雜劇」2「冤鬼鎮魂劇——公案劇」は次のように述べる。
- 英霊の鎮撫については、郷民の側が巫覡・道士・僧侶に依頼して英霊に対して「祭り」をささげ、神仏がこれをうけて英霊を「救済する」という手続きがとられている。これに対して無名の幽霊孤魂の鎮撫の場合には、郷民が巫覡・僧道を介して「祭り」をささげるのは同じであるが、神仏の側は直ちに「救済する」のではなく、「裁判」をおこない、孤魂の訴えの理非曲直を究めた上で、罪あるものは地獄へ幽閉し、救済に値するものだけに衣食を給し天界に超度せしめるといって、一種の裁判の構造をとる（二二三頁）。

ここ「孤魂鎮撫」の儀礼」から冤死した幽鬼の訴えを神仏やその代理者たる名裁判官が裁く、「亡鬼裁判劇」が発生したものと考えられる（一二五頁）。

(41) このような劇の典型が関漢卿の「竇娥冤」であろう。竇娥は義父殺しの罪を着せられて刑死し、裁判官となった父親竇天章の夢に現れて無実を訴える。それによって竇天章は裁判をやり直して冤罪を晴らし、娘に供養を約束する。前掲田仲著によれば、「この場面の裁判官は父であるが、彼自身の推理力に訴えることなく夢枕にたつた娘の靈魂の訴えにより事件を解決している。したがって、その裁判者としての本質は「神」に近く、裁判そのものも「超幽建醮」における神仏、僧侶道士による勸善懲惡の審判の形をひきずっているといえる」（一二七頁）。

(42) このような劇は果たしてどのような場場で上演されたのだろうか。祭祀性は薄い一方で、殺人や冤罪をあつかい官吏を馬鹿にした内容を含んでいるため、宮廷や宗族家堂で演じられたとも考えにくい。となれば、市場地において勾欄・妓院で演じられた可能性が高いであろう。特に重要な役割を果たす登場人物が行商人であることから見ても、市場地に往来する商人を観客として想定することができるのではないか。

付記

本稿は平成一九・二〇年度科学研究費補助金基盤研究（B）「中国近世白話文学の電子化状況情報及びコーパスの共有基盤の構築に関わる基礎的研究」の成果の一部である。